



日々好日は信心から

日々好日

六七三号

(令和七年三月発行)

終末時計が一秒短くなったという。今年には終戦八十年・被爆八十年であるということを知り、誰もが強く意識しておられることでしょう。

ニューヨークの国連本部で三月に核兵器禁止条約の第三回締約国会議が開催される。昨年ノーベル平和賞を受賞した日本被団協の方々や広島市長などが石破首相に会議に出席を要請していたが、オブザーバー参加も与党議員の参加も見送るといふ。

私たちは小学生の時、学校で「三たび許すまじ原爆を」と何度か歌ったことを思い出すまでもなく核兵器のない世界の到来を待ち続けてきました。

戦後八十年が米国の「核の傘」のもとでの平和であったと言われれば否定のしようもありませんが、世界で唯一の被爆国として、混沌とする世界情勢の中で国として何の意思表示もしないというのは情けないことである。

これでは、核保有国と非保有国の橋渡し役を務めることなどできることはありません。

私たち国民は負け犬の遠吠えのようであつても「核兵器反対」を叫び続けることを諦めてはなりません。やめてしまえば終末時計の針が一挙に進むことになると思ふからです。

弘法大師のお言葉

「一塵大嶽を崇くし、一滴海を深くする所以は、心を同じくし力を勤（あわす）が致すところなり」

(性霊集卷第八)



弘法
非遥

心中
即近

真如
非外

棄身
何求

日々好日

せん。それでもそれをなさなければ安らかな彼岸に渡ることはできません。だから、彼岸の七日間だけでなく常に意識するべく、仏前の供物に六波羅蜜を充てて忘れることなく修行に励むことを教えられています。

水を布施波羅蜜に配します。水が上から下に流れて万物を潤すように、智ある者は智を、財あるものは財を、力あるものは力を無条件で施与する。

塗香を持戒波羅蜜に配します。香を身に塗れば身を清涼にするが故に。

華を忍辱波羅蜜に配します。華の柔軟なるを忍の徳に比するが故に。

焼香を精進波羅蜜に配します。香（線香など）は一たび火を点ずれば休むことなきを精進不退に喩う。

飯を禪定波羅蜜に配す。飯食は法喜禅悦食と称し、禅定の身を長養するが故に。

燈明を智慧波羅蜜に配す。燈明は暗夜を照らし、危難を避けしめるが如く、般若の智慧は人を正道に導くが故に。

尚、焼香器を六器の中央に置くは、精進は六波羅蜜に遍在するが故なり。
(六種供養頌)

日々この六種の供物を仏前に供え、常に六波羅蜜の修行を為せば周辺は汚濁にあふれていても、泥中に咲く蓮花のように崇高な存在たりえよう。



お大師さまの教えはこの汚濁の国土を密厳国土としたいというものです。このお彼岸にその一步を踏み出しましょう。極楽往生も、到彼岸も、阿字帰入も言葉は違えど仏の世界への回帰ではなからうか。

五 輪 塔

節分、立春と過ぎての寒波の襲来では雪もちらつきました。日本海沿いの積雪地帯の方々のご苦勞を思えば寒いなどということすら憚られます。

その春まだ浅き日々、頭をはなれないのは、五月に営む本尊遷移・本堂新築十年記念の法要のことである。老躯をもつて為せることには限度があり、考えることも些末なことではありませんが、参詣の方々が大師信徒でよかつたと納得される法要を営みたい。

思い起こせば一大決心のもとに断行した移転事業でしたが、その無謀ともおもえることが無魔成就したことは檀信徒の絶大なる支持協力があつてのことですが、十年を経ての思いは夢また夢のような出来事でした。

それはもろもろのしがらみを断つことが発端でしたが、七十路の老衲には手に余る緊急且つ重大な事象であつた。人間、人生の大半を過ぎた土地には言葉では表せない愛着があり離れがたいものですが、それにもかかわらず私の背中を強く推した大きな存在のあつたことを知るのです。

若い時には幾多の難題にも果敢に取り組む体力や気力もあります。老いてはそんなものは存在しません。唯ただ目に見えない偉大な存在の導きに身を委ねたにすぎません。

住職である私にとってそれが朝夕に手を合わす本尊であることはすぐわかることですが、そのみ仏の導きに少しも不信を生じることなく突き進んでこれたのは己が信心の賜物であつた。

移転の土地、もろもろの経費の目算もない時点でのそれは、わたしの決断でありながら本尊仏の決断に他ならないということす。

だから、移転にかかわるすべての事柄が私のおもいはるかに超えて順調に運んだのだと理解するのです。

移転事業の最中では一から十まで私自身が考えそれを為したように思いその苦勞が報われたというような不遜な気持ちが少ないからであつたことですが、十年の歳月はそんな思いを微塵も残すことなく消し去ってしまいました。

その後の宗教法人登記、永代納骨の件、更にインターネット上のホームページの開設までも、住職の言動が信頼評価されたというより、手を差し伸べずにはおられない寺院であつたということに尽きます。

こうしたことどもも含めて感謝の法要を営みたいという事です。龍門寺という寺院は幕末明治維新に吉川公の手を離れ廃寺となり、明治中期に大師信徒により再興されたものの、定住の住職のいない寺とは名ばかりの寺院でした。

昭和九年に高野山の修行を終え晋山した父も寺の護持には戦前戦中戦後と苦勞が尽きなかつたことがよくわかります。その間、堂宇滅失の災害にも遭遇しているのですから…。

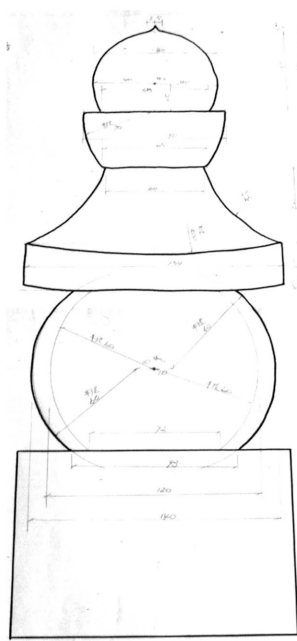
その都度、周辺の住民の支えがあつたことも忘れてはなりません。こうした人々も含め寺の数多の存亡の危機を乗り越えて、今回の移転事業も先代の頃からの信心の交流が底辺にあつたことも心強いものであります。

昭和四十八年に弘法大師ご誕生千二百年記念に新築した本堂を、今回の移転時に解体しましたが、その御堂の内陣の檼の円柱は現本堂の内陣の結界に再利用していますが、その上下の材を本堂の縁下に保管していましたが、その部材で何かできないかと常に思いを巡らせていました。

移転に伴う御堂の解体で生じた部材なので、五月に予

定している記念法要の記念に五輪塔が欲しいということに至りました。

そこで、初詣に参詣された河中工務店社長に制作を依頼すると、未知のことで躊躇されていましたが、快諾され、図面をひいてこられました。(左の図面がそれです)



図面によれば高さ38cmの小さな塔ですが、見事な形状で本堂(位置は未定)に安置するには程よい大きさです。密教大辞典(法蔵館)には次のように説かれています。「五輪塔は大日如来の三昧耶形にして、地・水・火・風・空の五大を表示する。五輪とは五大の異名なり。」

堂宇の落成、仏像の開眼の供養塔。及び亡者追福の為に建立する塔婆は皆、五輪塔に擬す。墓塔として五輪塔を持ちうるもまた之に基く」

長くなりますが、お大師様の「秘蔵記」の説明をみてみましょう。

「いわゆる五大とは阿字はこれ本不生の理の種字なり。種字を地輪に落とせば、すなわち水土の縁を待つて始めて芽す。この故に水輪あり。」

水土の縁ありといえども、必ず日輪の輓気を待つて莖葉を具することを得。この故に日輪あり。水土日輪の縁ありといえども、必ず解脱の風を待つて具足し、生長することを得。この故に風輪あり。

たとい水土日風ありといえども、しかもみなことごとく

堅実ならば何ぞよく物を生ぜん。この故に最上に虚空の輪あり。いわゆる五字嚴身なり。下、地輪より上、虚空に至るまで、それ重重に觀置すといえども、しかもなお五大互相に融通せり。もし常に一色を一処に觀念せば、病来つて身に著きなん。

行者、この情を知るべし。この率都婆光を放つて法界に遍じて毘盧遮那の身と成つて、種種の莊嚴あり。云々」

(この文中の日輪は火輪のことである。)

真言密教入門の書と肩書のある「入密暗唱要文」に五輪塔婆頌があります。難しくなりますが、参考までにそれをみてみましょう。

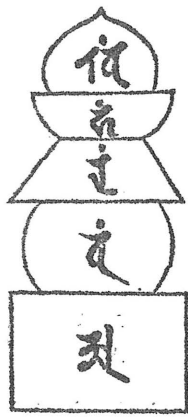
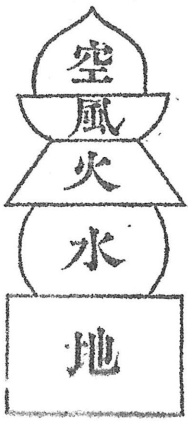
方円二形実在界 三角半月及寶珠
現象界中情非情 支分五輪有神秘

五輪塔婆は真言宗の最も深意の存するものにて、この一本の塔婆に一宗の原理は籠れり。

方円二形とは方形即ち四角形は物質の胎藏法を表したるものにて、円形は精神の金剛界を表したるものなり。

胎藏法は地曼荼羅なれば之を下に置き、金剛界は天曼荼羅なれば上に置く、此の最下の二層実在界の形なり。

第三層に三角形を載す。此の三角形は胎藏法の方形



智拳印は金剛界を標し、定印は胎藏界を標す、これ兩部不二の曼荼羅なり。



空輪の二點は肉髻なり、

を隅より隅に切たる半形なり。第四層には半月形を載す。是れ金剛界の円形を半裁したる形なり。

第五層即ち最上層に寶珠形を載す。此の形は金剛界の半裁の半月形と、胎藏法の半裁の三角形とを合わせたる形なり。

(以下省略)

五輪塔の何たるかを知らない人も、高野山に参詣された方は奥之院の杉木立の間の諸大名の五輪塔を目にされておられるはずです。その数は二十万とも三十万ともいわれています。

その墓域を掘れば無慮多数の一尺ばかりの五輪塔が見出せるという。これはお大師様御入定の聖なる場所に葬られ死後も大師のお傍に居たいという大師信仰の証でありましょう。掘り出された五輪塔がうず高く積み上げられた塚が二カ所あります。

旧本堂の廢材をもつてしての五輪塔婆の造立は、新材をもつてしての造立よりも尊く有難いのは、旧本堂建立の檀信徒の清き信仰心が金胎兩部の大日如来の表示としてお迎えするということです。

五月十八日の記念法要をこうした過去世の人々とも共に迎えたい。



高野山奥之院弘法大師御廟前奉納御写經 六五〇

- 二卷奉納 岩国市装束町四丁目 福島 松代殿
 - 二卷奉納 岩国市南岩国町二丁目 沖本あつ子殿
 - 一卷奉納 岩国市通津 吉岡 律子殿
- (一月十一日〜二月十日奉納分)



凶非時を知って妄りに説くこと莫れ

舎衛国に大長者がありました。財宝は無量にして常に仏や比丘を招いて施食供養を為していました。

在る時、長者は尊者舍利弗を招きました。舍利弗は摩訶羅なる若き比丘を伴いました。丁度その日、多くの商人が海外から財宝珍品をえて帰国したときでした、

その国の王は常日頃の恩顧に答えてその珍宝を長者らに分ち与えていました。長者の妻は懐妊し、男の子を生み、長者の家は目出度きことが重なっていました。

舍利弗は長者らの前で祈りをささげました。

「今日、良き報いを得て財利、願わざるに家に集まり、心樂し。信心踊發して十力を念ずれば、倖せことが後に必ず至らん」と。

長者はこれ聞いて喜び妙なる毛氈を二張、舍利弗に与えたのでした。摩訶羅は何も貰えませんでした。

精舎に帰り摩訶羅は舍利弗に言いました。

「私にあの祈願の文を教えて下さい」と。

舍利弗は言いました。

「この咒願の文は常に用いるものではない。用いる時と用いてはいけない時があることを知らなくてはならない」と。一旦は断るも摩訶羅は執拗に求めるので、用不を説き聞かせて咒願の文を授けたのでした。

摩訶羅は思うのでした。

「われ 當にいずれの時にか上座となつてこの咒願の文を用いたし」と。

しかし、摩訶羅は待ちきれず、長者の家に往き上座として振る舞つたのです。だがその時、長者の家は雇つた商人が海を出て珍宝を得るも嵐に遭遇してすべてを失つ

ていたのです。長者の妻はなぜか役人に訴追され愛児をなくして間もない時だったのでした。このように憂うべきことが重なつていたにもかかわらず摩訶羅は咒願の文を唱えて祈つたのです。

長者はこれを聞いて激怒し棒で打ち据えるのでした。打ちひしがれてとぼとぼと歩いているとしらずしらずに王の胡麻畑に入り畑を荒らしてしまつたのでした。ここでも畑の番人に殴られるはめになつたのでした。

摩訶羅は平謝りして歩いていけると、刈り取つた麦を積み上げて塚のようなものを目にしました。それは右に巡つて豊穰を祈るものだったのでしたが、それを知らず左に巡つものだから、麦畑の主は怒つて殴りかかつてきました。

這這の体で逃げ出し埋葬の場に至り、ここではこともあるうに「大入り大入り」と唱えたのでした。葬主は是を聞いて怒りここでも棒で打たれ、二度と「大入り」など唱えないと心に誓うのでした。

しかし、今度は嫁入りの列に遇い「今より以後、またこのようなことがないように」と、唱えたのでした。これを耳にした嫁入り行列の者は憤怒し鞭打たれもしました。

摩訶羅はそれでも為すことが悉く反対であつたことが理解できないのでした。今度は獵師の仕掛けた羅網に觸れて鳥を逃がし獵師に打ち据えられ、腹ばいして逃げていると洗濯屋に盗みに入ったと疑われ、打棒をくわえられたのでした。

精舎に帰り諸比丘に言いました。

「われ、舍利弗の授けた咒願を唱えて大苦悩を受く」と。佛は魔訶羅の過去世を説かれ、宿縁のおそろしさを語られ、「非持を知るべし。みだりに説くことを得ざれ」と。

あとがき

昨年のような災害や事故がなく今年には平穏に過ぎてきたように思っていました。が、埼玉県の国道陥没事故には驚きました。救出作業の困難さはわかるもののその遅れに居た堪れない思いでいます。

高度成長期に敷設された橋やトンネルなど様々なインフラが老朽化し、補修工事なども行われてはいるものの今回のような事故が起こると、誰もが被害者となるというところで不安感は拭いきれません。外国では航空機事故もこのところ多発していますし、文明時代ならではの事件事故の多さ大きさには困惑しています。

初観音・星祭を天候にも恵まれて無事に営むことができ安堵しています。

横山の吉川資料館で吉川元長展が開催されています。是非足を運びたいと思っています。言うまでもなく元長公は万徳院の創設者であり菩提寺でもあります。毛利元就の二男で吉川家を継いだ元春の長男です。文武に長じておられたという。それをこの目で確かめたい。

冬の殺風景な境内では、山茶花に代わって椿が目を樂ませてくれています。境内の数少ない樹木の中で二本の梅が順調に育っています。開花が待たれることです。

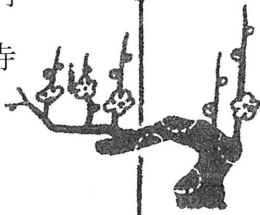
発行者

高野山真言宗

寶池山 龍

門 寺

吉 岡 光 昭



六道能化の地藏尊

入諸地獄令離苦

無佛世界度衆生

今世後世能引導



岩国市通津3634-3 ☎740-0044

高野山真言宗

寶池山 龍 門 寺 發行

☎0827-38-4611 番